

国立民族学博物館の収蔵品 ⑤8

クリケット・ユニフォームとバット



コルカタ・ナイトライダーズの2014年のユニフォームと防具。多国籍企業がスポンサーにつくのは珍しいことではなく、そのロゴが入っている。向かって右のバットに選手のサインが見える。

クリケットは中世の英国が起源の球技で、日本ではなじみが薄いのが、英国やその元植民地では大変人気がある。現在は四年おきにワールドカップ大会も開催され、そのテレビ視聴者数は二〇億人を超えるとも言われているほどである。

インドをはじめ南アジア諸国でもクリケットは圧倒的な人気を誇っている。英国支配期の十九世紀半ばにはインドの人びともプレーをするようになり、ボンベイ（現在のムンバイ）で開催されるクラブ同士の対抗戦やインド人対英国人の試合には多数の観客が押し寄せ、二十世紀に入るとラジオ放送も熱狂的に楽しまれたという。インドとパキスタンが分離して英国から独立すると、両国は政治的にも対立するだけでなく、スポーツでも強烈なライバル意識を燃やすようになる。中でもクリケットは両国の国技と見なされ代表戦は常に極度に緊迫した雰囲気の中で戦われてきた。このライバル関係を頂点として両国のクリケットは発展し、国内でもさまざまなレベルのカップ戦が盛んとなった。他の南アジア諸国でも一九八〇年代からクリケットが庶民にも普及、国代表レベルの水準も向上し、スリランカ、パキスタン、インドが相次いでワールドカップで優勝するに至っている。ナショナルチー

ムの代表はどここの国でも英雄で、例えばパキスタンの優勝時の主将イムラン・カーン氏が政界に進出し、昨年遂に首相にまで上り詰めたことは記憶に新しい。

インドでは一九九〇年代からテレビ放送の自由化が進み、チャンネル数も視聴者数も急増したが、クリケット番組は映画の再放映と並んで最も人気のあるコンテンツとなった。今も複数のスポーツチャンネルが毎日一日中クリケット番組を放映している。その人気を背景に約十年前からプロ・リーグも始められ、クリケット熱は高まる一方だ。リーグには世界の有名プレーヤーが参加し、年棒数億円という選手がざらにいる。YouTubeでも生放送される世界初のプロ球技で、テレビがなくとも携帯端末で視聴可能である。将来のスターを夢見る子どもたちが街角で草クリケットに興じる姿も当たり前の光景となっている。

国立民族学博物館の南アジア展示では、このクリケット熱を庶民生活の消費社会化の一端として紹介しようと考えた。上記のプロ・リーグの中には映画俳優として絶大な人気を誇るシャー・ルク・カーン氏がオーナーであるチームがあり、クリケット人気の高揚にも一役買っている。そのグッズが展示できればスポーツとメディアの相乗作用も示せる。そこでこのチーム、コルカタ・ナイトライダーズの本部に赴き協力をお願いしたところ、ちょうどそのシーズンで優勝を果たした際のユニフォームや決勝戦に出場した選手全員のサイン入りバットを快くご寄贈いただいた。クリケットのユニフォームや用具の展示は世界的にもかなり珍しい。目立たない展示だが、植民地スポーツから国民的娯楽にまでなった球技の歴史を背負った貴重な資料となっている。